



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	サハリン少数民族ウイльтаの「皿敷」の文化的・社会的意義の考察：物質文化の視点から 1. 樺太編
Author(s)	笹倉, いる美
Citation	北方人文研究, 19, 35-47
Issue Date	2026-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99327
Type	departmental bulletin paper
File Information	19_04_35-47_Sasakura.pdf



サハリン少数民族ウイルタの「皿敷」の文化的・社会的意義の考察 —物質文化の視点から 1. 樺太編—

笹倉いる美
(北海道立北方民族博物館)

要旨

本稿は、サハリンの少数民族ウイルタが製作した刺繍製品「皿敷」に焦点をあて、その誕生と展開を物質文化および植民地政策の視点から考察するものである。

「皿敷」は、ウイルタの伝統的な生活用具の中に本来存在したものではなく、昭和5(1930)年にウイルタらの集住地オタスの杜に設置された「敷香教育所」における実業教育の一環として新たに創出されたと考えられる。

「皿敷」には、衣服や靴、食器入れなどのウイルタの生活用具に対して用いられていた刺繍技術が活用された。さらに生活用具を飾っていた白樺樹皮の切り絵を発展させたとみられる紙製の型紙が新たに用いられるようになった。

「皿敷」は児童だけではなく、観光客向けの土産品として地域の女性たちによっても作られていた。

「日本人」は「皿敷」をはじめとする刺繍製品については高く評価していた一方で、ウイルタの生活様式や彼らの性格については非常に差別的な記述をしているという二面性がみられる。

本稿では「皿敷」がいかに日本人の需要と制度的枠組みによって形作られたものであったのかを、具体例を示しながら分析し、植民地において利用可能な民族的資質の選別と奨励が行われたという構造的問題を明らかにする。

1. はじめに

本稿は、サハリン少数民族ウイルタの物質文化である刺繍製品「皿敷」に焦点を当て、その歴史的背景、製作技法、文化的・社会的意義を明らかにすることを目的とする。皿敷は、ウイルタの女性らによってつくられた円形ないしは四角形の刺繍製品で、ウイルタらに固有の物質文化である(図1、図2)。こうした独自の物質文化が先住民にとっていかなる役割を果たしてきたのかを考察することで、物質文化自体を解明することのみならず、文化的アイデンティティを可視化し、ジェンダー構造の把握や現在につづく植民地主義的枠組みからの脱却と文化復興への手がかりとすることを視野にいれている。

ウイルタの刺繍製品「皿敷」が、樺太で誕生し、戦後網走に移住した人々の生活を経済的に支え、アイデンティティの象徴となったこと。さらに網走市の日本人女性の間にまで定着し、現在日本でウイルタを名乗る人物が不在となった状況のなかでも、サハリンのウイルタと日本にもたらされたウイルタ文化の媒介となっていること。これらの点を実用的、象徴的面から検討することを意図している。

本稿ではこのうち「皿敷」の樺太時代についてを扱うこととする。



図1、2 北海道立北方民族博物館所蔵 トナカイ革製刺繍製品「皿敷」(ウイルタ)
表と裏 1938年収集。撮影：城野誠治

なお、物質文化を Reynolds による「人間社会における有形の現象であり、本能によるものではなく、学習されたパターンに基づいて意図的に作り出された産物」(Reynolds 1983: 213)と定義する。

サハリン島の帰属が決着したのは近代になってからのことである。嘉永7(1855)年の日露和親条約でもサハリン島はどちらの国に属するとも決めず、明治8(1875)年の樺太千島交換条約によってサハリン全島がロシアの領土となり、日露戦争後の明治38(1905)年のポーツマス条約によって、北緯50度以南が日本領、以北がロシア領となった。この時日本領になった土地を本稿では樺太と呼ぶこととする。

また本稿では田村(2023: 307)を参考に、アイヌ以外の民族名を自称に統一する。前者が自称、()内が樺太での呼ばれ方である。ウイルタ(オロッコ、オロチョン)、ニブフ(ギリヤーク)、ウリチ(サンダー)、エベンキ(キーリン、ツングース)、サハ(ヤクート、ヨッコ)である。ニブフはアムール下流域とサハリン島に暮らす二集団があり、サハリンのニブフの自称としてはニクブンのほうが正確であるが本稿ではニブフに統一する。

なおサハリン島には前述のとおりいくつかの少数民族が暮らしていたが、この中でサハリン島の先住民とされているのは、サハリンアイヌ、ウイルタ、ニブフの三民族である。

またサハリン島の国境策定に先住民が関わった形跡はない。樺太千島交換条約による国境画定ではサハリンアイヌが分断され、ポーツマス条約ではウイルタ、ニブフ集団が分断されることになってしまい、南のウイルタ、ニブフは日本の、北のウイルタ、ニブフはロシア、そしてソ連の影響を受けることになる。

先住民らは樺太では「土人」として扱われていた。昭和5(1930)年の国勢調査では、「土人ノ種族別世帯及び人口」としてアイヌ、ニクブン、オロツコ、キーリン、サンダー、ヤクートが挙げられており、アイヌはさらに北海道旧土人と樺太土人にわけられていた(樺太庁 1934: 842)。

樺太は国内にいながら「土人」に会うことのできるエキゾチックな観光地となっていき、当時の観光案内でも特記されている。(井出 2024: 33)。

なお前述の国勢調査による昭和5(1930)年の人口は、ウイルタは334名、ニブフは113名、エベンキは24名、ウリチは10名、サハは2名となっている(樺太庁 1934: 842-843)。

ウリチはアムール川下流域を本拠地としている。エベンキはシベリアに広く暮らし、一部が19世紀にサハリン島北部に移住したとされる。サハは、サハリンの先住民ではなく、1926年に現在の

サハ共和国（ヤクート）から樺太へ移住してきたウイノクロフ家とペトロウィッチ家の二世帯である。ウイノクロフ家だけで4名であるため、本国勢調査とずれがあることもわかる。

ウイлтаはトナカイ飼育をすることで知られ、夏はカウラとよばれる樹皮葺きの家に、冬はアウンダウと呼ばれるテントで生活し、ニブフは定住し漁撈を主としていた。樺太のサハリンアイヌ以外の少数民族は、昭和初期に敷香（現在のポロナイスク）郊外に設けられたオタスの杜と称された地域にその多くが暮らすようになる。オタスの杜には昭和5（1930）年に敷香土人教育所、のちに敷香教育所と改称された少数民族子弟を対象とした学校が作られる。この学校では川村秀弥、ナラ夫妻が教員を務めていた。

樺太で作られた「皿敷」はウイлтаとニブフの女性（児童含む）によって作られていた。ウイлтаによって作られたのか、ニブフによって作られたのかを見分けることは困難であるが、博物館等に収蔵されている資料には、付されている情報からどちらの民族の女性によって作られたのかを判断できる場合がある。博物館に収蔵されている「皿敷」はウイлтаのものとされているものがほとんどであることと、戦後網走に移住したウイлтаが「皿敷」をある意味発展させていったことに言及することから、本稿ではウイлтаの「皿敷」を中心に検討する。

なお引用にあたっては旧字体を新字体に改め、今日では不適当と思われる表現についても、資料的価値を鑑み使用する場合がある。

2. 「皿敷」とは

2.1 「皿敷」の形態

樺太で制作された「皿敷」は、円形または四角形であり、大きさは約25～30 cm、厚さは約1 mmである。周囲にはトナカイ革製に細く切り込みをいれて作られたフリンジか、種不明の毛皮がつけられている。フリンジは本体とは別に作られ縫い付けられている。

皿敷の表面には糸刺繍により文様が施されている。

「皿敷」の素材はトナカイのなめし革あるいは布である。ただし樺太で作られた布製皿敷の現物の所在は不明である。民俗学者の宮本馨太郎が昭和13（1938）年に撮影したフィルムや写真週報に掲載された昭和17（1942）年の敷香教育所の写真（情報局 1942：20）では、女子児童が黒布に刺繍をしている様子が記録されている。

樺太でトナカイ革刺繍製品「皿敷」は前述したようにウイлтаあるいはニブフの女性によって作られていた。ウイлтаは父系をとることから、ウイлтаとニブフの男女が婚姻関係を結んだ場合、子は父方の民族とされる。このため、他民族とされる子に対しても、母方の民族文化が伝承されている可能性がある。結果として製作者の民族誤認の可能性も否定できないが、本稿では、「皿敷」の形態にウイлтаとニブフの間の明確な差異が認められないため、この点は考慮しないこととする。

2.2 「皿敷」の名称

「皿敷」のウイлта語と日本語の名称について、トナカイ革製のものに限定して検討する。

2.2.1 ウイлта語の名称

(1) 潤潟久治

潤潟久治は、昭和3（1928）年～昭和10（1935）年頃には樺太で、戦後は網走でウイлта語の調査を行っていた（大矢 2016：26）。彼の研究成果は『ウイлта語辞典』（潤潟 1981）としてまとめ

られている。この辞典は「皿敷」に対して二つのウイльта語を記録している。旭川市博物館所蔵資料写真のキャプションとしての一つは「irgá 刺繍 トナカイ皮の敷皮に刺繍」であり、もう一つは「pilácci tənī (皿)の台敷(トナカイのなめし皮で作、刺繍してある)」である。前者の「皿敷」は四角形であり、後者は円形であるが、名称の違いに形状の説明はない。

irgá 刺繍、飾り、衣服や器具の文様

pilácci 皿の台敷(トナカイのなめし革で作刺繍してある)

tənī トナカイの頭の皮で作った座布団、トナカイの毛皮の敷物、トナカイのなめし皮で作った刺繍のある皿敷(潤潟 1981)

(2) 池上二良

池上二良は1950年代から平成にかけて、主に北海道に移住したウイльтаをインフォーマントとしてウイльта語研究を行っていた。

池上二良の研究成果をまとめた『ウイльта語辞典』(池上 1997)は、皿敷についてのウイльта語を掲載していない。

なお潤潟の irgá、tənī に相当する語の池上のウイльта語辞典での説明は次のとおりである。

irga 模様、文様(刺繍などの)。

təni 敷皮(となくいの頭の毛皮などでつくる、屋内で敷いてすわるのに使うほか、となくいの鞍に敷く)

また、池上がウイльтаの佐藤チヨとまとめた『ウイльтаの暮しと民具』では、毛皮製の座布団に tənī をあて、「皿敷」には「ウイльтаの模様(irga)の刺繍」とのキャプションがついている。池上は「皿敷」についての佐藤の「となくいのなめし皮のいぶしたものに絹糸で刺繍したもの」との説明を記し、またウイльтаの生活用品でなく、日本人用のものであることを断っている(北海道教育庁社会教育部文化課編 1982:95)。

(3) 木村捷司

現在北海道立北方民族博物館が所蔵する「皿敷」は、以前は網走市立郷土博物館に収蔵されていたもので、北海道函館市出身の画家・木村捷司が昭和13(1938)年に収集したものである。昭和29(1954)年に木村から網走市立郷土博物館へ譲渡された。

この資料には、木村が手製の紙札をつけており、tni と記されている。潤潟の tənī にあたる語であろう。木村はオタスの杜の先住民を描くため、長期にわたり同所に滞在していることから(北海道立函館美術館 1996:5-6)、直接ウイльтаから聞き取った名称である可能性が高い。このことを踏まえ、共に網走市立郷土博物館の館長を務めた米村喜男衛または米村哲英が整理したと思われる『オロッコ・ギリヤーク民俗資料調査報告書』では、「皿敷」に「オロッコ語 Tni トニ」の語が与えられている(北海道教育庁振興部文化課 1974:口絵)。

(4) 山田祥子

山田は、サハリン島北部に住むウイльта女性にインタビューをし、「皿敷」がサハリン島北部のウ

イルタの間にはなかったこと、あえて呼んだ場合、エベンキ語からの借用語と思われる kumalaa であるとの回答を得ている（山田・笹倉 2011：109）。

以上の文献・調査結果から「皿敷」を指す固有のウイлта語の名称は確認できず、大型の敷物を意味する一般語彙（təni など）が、「皿敷」に対して転用されていた可能性が高いと考えられる。

2.2.2 日本語の名称

ウイлтаの樺太で作られたトナカイ革製刺繍製品「皿敷」を所蔵している主な博物館における「皿敷」の日本語名称は次のとおりである。

(1) 網走市立郷土博物館

皿敷（網走市立郷土博物館 1981）

(2) 旭川市博物館

敷皮（市立旭川郷土博物館 1973）

(3) 北海道博物館

皿敷（北海道開拓記念館 1981）

皿しき（亀丸 2025）

花瓶敷皿敷（北海道博物館編 2025）

(4) 国立民族学博物館

電光スタンド敷物（日本民族学協会附属民族学博物館（保谷民博）人物／資料データベース）

敷物（国立民族学博物館 2013）

皿敷（国立民族学博物館 2020）

(1) 網走市立郷土博物館が所蔵していた「皿敷」3点のうち2点は現在北海道立北方民族博物館が所蔵している。この2点は前述したように画家・木村捷司が収集したものである。資料に木村が付けた紙札に「皿敷」と書かれていることから、網走市立郷土博物館では資料名として「皿敷」を採用したと考えられる。

(2) 旭川市博物館（以前は市立旭川郷土博物館）が収蔵している資料は、河野広道が昭和7（1932）年～昭和13（1938）年にかけて行った、昆虫採集調査旅行に伴って収集されたものである（河野 1976：183）。

(3) 北海道博物館（以前は北海道開拓記念館）では皿敷、皿しき、花瓶敷の語が用いられている。

(4) 国立民族学博物館の3つの名称はすべて同じ資料に対しての名称である。特に興味深いのは「電光スタンド敷物」である。当該資料は、宮本馨太郎、古野清人が昭和13（1938）年に収集したと推定されている（国立民族学博物館 2013：212、データベースでは石田英一郎の項目にある）。収蔵年は昭和18（1943）年で、このときの原簿に電光スタンド敷物とあり（国立民族学博物館 WEB）、国立民族学博物館の設立（1977年）以降に付けられた名称ではない。

「皿敷」が実際に皿の下に敷かれていた可能性は低いと考えられるが、日本の博物館においては、ウイルタの刺繍付トナカイ革製品を示す通称・便宜的な名称として「皿敷」が広く定着していることが確認できる。

3. 「皿敷」の誕生

ウイルタやニブフの伝統的な実用品として「皿敷」は存在しておらず、オタスの杜が設立される以前に樺太を訪れた研究者たちの記録や収集品にも、「皿敷」を示すものは見られない。たとえば、大正10(1921)年から12(1923)年にかけて樺太を訪れた長根助八は、土産品として白樺樹皮製の容器を紹介しているが、「皿敷」については言及していない(長根 1925 参照)。

こうしたことから「皿敷」が、オタスの杜で誕生したと考えられる。

また、2.2.1(4)で紹介したように、サハリン北部のウイルタ女性は、自分たちの地域には「皿敷」がなかったと言及している。このことから、「皿敷」はウイルタが南北に分かれた後、南部において新たに生まれたものであり、北部のウイルタの文化には含まれていなかったといえる。

川村秀弥や山本祐弘等の樺太に在住していた研究者が「皿敷」に言及していないのは、「皿敷」が新たに作り出されたものであり、サハリン少数民族の伝統文化を調査研究していた彼らの関心を引き対象ではなかったものとする。

河野本道は、河野広道が収集したウイルタの資料について、次のように説明する。

1930年、ここに『敷香土人教育所』(同年8月『敷香教育所』と所名変更)が開設され、その学科目に民族的特徴を生かした「土俗品製作」を行う「手工」および「手芸」が含まれた。こうした実業科目の実施活動を通じて、この書にみられるようなトナカイのなめし皮に華やかな刺しゅうを施した財布や煙草入れ、小形の敷物などが生まれた。それらの作品の普及が、実業の道を開くところからなされたとはいえ、刺しゅうを施す技術は、近隣の所属の場合と同じように、ニクブンやウィタの従前からの伝統であり、それらの作品にも彼らの伝統が極めてよく示されている。すなわち、トナカイのなめし皮に裏面に糸を出さずに刺繍する技術や刺しゅう糸の色の組み合わせ方、文様の構造や形などといった点にそれを認めることができる。ただし、それらを作者を知らずしてニクブンの作品とウィタの作品とに見分けることは困難である。というのは、それらの作品は、『オタスの森』で、ニクブンやウィタがいろいろな技術や文様を互いに寄せ合い、互いに影響されながら生み出したものだからである。(河野 1976: 13-14)

樺太から北海道へ移住した、サハリン少数民族によって設立された北方少数民族資料館ジャッカ・ドフニの展示資料目録では次のように説明される。

この種の敷物はウイルタにはなかったが、1931年(S.6)、オタスに「土人教育所」が設置されて後、図画、工作の授業を通し、あらためて自らの民族がもつ紋様の美しさが認識された、という。よくみられるトナカイ皮の敷物は、日本人好みの敷物として、授業はもとより、家庭でも子どもや婦人が内職(小遣いかせぎ)としてつくった、という。(ウイルタ協会資料館運営委員会編 1980: 37)。

いずれも刺繍製品と教育所との関係が述べられている。教育所の説明として、昭和8(1933)年の

樺太庁敷香支庁のパンフレットから該当部分を紹介する。

女子の刺繍は紙を切り抜きたる型紙によりて原型を定め刺繍をするのであるが、革の裏には殆ど針目を出さず綿密な縫い方をする。模様はアイヌとは大分趣を異にし、渦巻を基本とした左右相称式で、此の形称緩漫となれば唐草模様に類してくる。唐草の起源か又唐草の変化か何等からの因縁あるように思われる。

教育施設

(中略)

2. 実業科

水産実習 曳網刺網

農業 蔬菜の栽培

副業 養兔、養鶏、養豚

手工 土俗品製作、

手芸 同 (樺太庁敷香支庁 1933: 15、24)

上記のことから教育所ではウイльтаにもともとあった伝統的刺繍の技術を発展させ、実業にいかすことまでも視野にいれていたといえる。

大塚和義は、宮本馨太郎の昭和 13 (1938) 年のフィルムの解説のなかで、オタスの杜の女性たちの手工芸について「彼女たちは皮の容器や衣服に伝統的な文様を刺繍で飾ってきた。この技術を生かして、トナカイ革の財布、花瓶敷きなどに刺繍したものが観光客に好評で、よい収入源になっていた。現在残っている作品をみると、絹の糸刺繍は皮の表面に美しく表現されているが、皮の裏面にまで針を通さず、皮の厚みのなかばで針を表面に出すという、極めて繊細な技術を用いていることがわかる。」と、「皿敷」が観光客の土産品として人気であったことに言及している (大塚 2016: 421-422)。

このことから、教育所に通う子弟だけではなく親たちも「皿敷」の製作に携わっていたことがわかる。大塚は「オタスの教育所で授業を受けた北川アイ子氏 (現在、網走市在住) によれば、トナカイの皮に丹念な刺繍を施した財布や円形の花瓶敷きなどを川村校長に渡しておく、夏場を中心にオタスの杜へ見物にやって来る観光客に売ってくれたという」と、皿敷が土産品として流通していたことについても触れている (大塚 1996: 7)。

4. 皿敷の文様と切り絵

ウイльтаの生活用具のなかには刺繍がほどこされたものが少なくない。例えば靴や衣服、食器入れ、煙草入れなどである。ただし直接毛皮あるいはなめし革の部分に刺繍されるものは限定されている。トナカイ毛皮製の靴の場合、履き口に刺繍をほどこした布を取り付ける。白樺樹皮製の食器入れはアザラシ等の毛皮・皮でおおわれているが、上部は布製になっており、この部分に刺繍が施されることがある。このように、革・毛皮製品であっても刺繍した布をあとから縫い合わされることがある。

トナカイ革に直接刺繍が施されている例は、トナカイ革製の巾着状の煙草入れである。

この煙草入れは大きさに二通りあり、一つは大型で、首からぶら下げることのできる長い革紐が

ついているもの。もう一つは小型なもので、革紐が短いものである。

大型の煙草入れと小型の袋では、施されている文様が異なっている。大型のものには、例えば市立函館博物館所蔵、北海道立北方民族博物館蔵2点（図3）、旭川市博物館所蔵2点があり、いずれも横広の市松文様のラインとおそらく切り絵の型は用いられていない渦巻き文との組み合わせになっている。一方小型のものには市松文様は認められず、大型の煙草入れにほどこされる刺繍よりも複雑で、多くが中央から外側に広がる皿敷と同じスタイルの文様が施されている。

刺繍の技術自体についてはオタスの杜以前から存在していたことが、大正10(1921)年～12(1923)年にかけて樺太を調査した長根助八の記録から確認できる（長根 1925：191）。

次に、文様の型紙について検討する。「皿敷」の文様は中央から広がるロゼッタ型で、曲線が主体になっている。この文様は、ウイлтаが従前から作ってきた白樺樹皮製の箱に施された文様と同系統のものとしてよいだろう。作り手が紙を数回折り畳み、鋏で切り抜き、広げてできた文様を刺繍の型紙として用いた。

昭和8(1933)年の樺太庁敷香支庁のパンフレットに「女子の刺繍は紙を切り抜きたる型紙によりて原型を定め刺繍をする」とある（樺太庁敷香支庁 1933：15）。

昭和13(1938)年にオタスの杜で調査を行った宮本馨太郎は、ウイлтаとニブフについて「女子の刺繍は彼等の誇る技術である」とし「女子の刺繍は針と糸と指ぬきをもって行われる。多くは馴鹿の鞆した皮・皮袋・皮手袋・皮靴などにほどこされる。刺繍にはまず紙を切り抜いた型紙をもって下図が定められる。その刺繍は皮の裏面に全く針目を見せないのを特色としており、文様は大体唐草文様が基本のように感ぜられた。オタスの土人教育所でオロッコ・ギリヤークの女兒が色紙を切り抜いて型紙を作り、とりどりの色糸で刺繍しているのをしばしば実見した」と説明する（宮本 1958：12）。

先述したようにウイлтаには白樺樹皮製の容器を飾るために、白樺樹皮を切りぬいて文様を作る伝統があったことから、紙を切って文様をつくることにはさほど困難を覚えなかったと考えられる。

なお、ウイлтаやニブフによる切り絵は、あらかじめ下絵を描くことなしに切り抜かれる。

ウイлтаの切り絵で特徴的なのは、どのような大きさのものでも切れることで、刺繍の対象にあわせて大きな紙でも小さな紙でも、サイズにあわせている。参考に言語学者の服部健が昭和16年頃に収集したニブフの切り絵を示す（北海道立北方民族博物館資料登録番号 N-144）。幅が14.5 cmであり、色折り紙製である（図4）。



図3 北海道立北方民族博物館所蔵 トナカイ革製刺繍製品「たばこ入れ」（ウイлта）1938年収集。



図4 北海道立北方民族博物館所蔵ニブフの切り絵。1941年頃収集。

5. 「皿敷」の刺繍のステッチと色と糸

次に皿敷の刺繍のステッチと色と糸についてふれる。なおウイльтаの運指は、針先が作り手に向かって進む。

刺繍のステッチについては、先行研究がいくつか見られる。ここでは河野本道と田中淑乃の研究を紹介する。なお田中の調査対象は、皿敷に限定されていない。

また、田中は、針の持ち方や運び方、指ぬきの使い方において欧風刺繍とは相違があり、西洋のステッチ名をそのまま当てはめるのは困難であると指摘している（田中 1989：89）。ウイльтаのステッチを西洋刺繍のステッチで分析することへの課題は残るが、ここでは便宜的に西洋刺繍のステッチ名を用いることとする。（ステッチ名の番号は便宜的に筆者が付した）

(1) 河野本道

河野広道が収集し、現在旭川市博物館に所蔵されている資料を分析している。これらの資料は、1932（昭和7）年、1937（昭和12）年、1938（昭和13）年、1940（昭和15）年に収集されたものである。

ウイльтаに認められるステッチは、1. チェーンステッチ、2. ヘリンボーンステッチ、3. アウトラインステッチ、4. クローズド＝フェザーステッチ、5. ブランケットステッチ、6. ボタンホールステッチであるとしている。（河野 1976）

(2) 田中淑乃

田中は1980年に網走で調査したことから次の9つのステッチを確認したという。1. チェーンステッチ、2. ヘリンボーンステッチ、3. アウトラインステッチ、5. ブランケットステッチ、6. ボタンホールステッチに7. バックステッチ、8. サテンステッチ、9. クロスステッチ、10. クローズドヘリンボーンステッチを加え、さらに河野が4. クローズド＝フェザーステッチとしたものについては、4. クローズド＝フェザーステッチではなく、チェーンステッチのバリエーションであろうと、ダブルチェーンステッチという名称を与えている。（田中 1989）

田中がダブルチェーンステッチとよぶチェーンを二列にするステッチは、戦後網走に移住したウイльтаによって作られた布製のウイльта刺繍の主要なステッチと言ってよいが、残存する樺太時代

のトナカイ革製の「皿敷」にはヘリンボーンステッチほど多くは認められない。

言語学者の服部健は昭和10年代にニブフのステッチを収集しており、このサンプルにおいてステッチは14種類ある(白石・笹倉 2007)。上述した「皿敷」のステッチより多いのは、しつけにつかう際のステッチ(製品には残らない)が含まれているからである。

ウイлтаの刺繍に見られる色として河野は、赤、橙、水色、青、紫、茶を挙げている。河野は大興安嶺のオロチョンと比べても多様である理由を、日本人が職業指導の一環として多様な刺繍糸を導入した結果だとしている。「日本人が職業指導を目し、刺しゅう糸を豊富に、無作為に導入し、細かい文様形態や刺しゅう糸の色調などの民族的伝統の差異を無視して作成を奨励してできたものである」としている(河野 1976)。

樺太時代の「皿敷」の刺繍に用いられる糸の素材は絹糸と木綿糸で、糸色は多くが絹糸である。

6. 日本人による「皿敷」の評価とまとめ

以上ウイлтаが樺太で製作したトナカイ革製刺繍製品「皿敷」の概要について整理した。本節では技術評価と植民地的視線の交錯に注目し、まとめとする。

この「皿敷」については、裏に糸目を出さないことがしばしば言及されており(樺太庁敷香支庁 1933、宮本 1958、河野 1976 他)、このことが「皿敷」を評価する理由の一つになっている。しかし、田中はそれが素材に由来し、布の場合は裏に糸目が出ることを指摘している(田中 1989: 89)。筆者もまた、網走に移住したウイлта女性から、トナカイ皮の場合は素材の特性上、裏に糸目が出にくく、薄手の布では裏に糸目が出やすくなるため、特段裏に糸目を出さないよう注意しているわけではない、との話を聞き取っている(笹倉 1998: 101)。

裏に糸目がでないことを高い技術と判断するか否かは、調査者が実際に刺繍を行うかどうかによる観察の違いではないかと考える。表面の刺繍の美しさや、針目の整い方ではなく、製品の裏に糸目を出さないことを技術が高いと評価されてきたのは、おそらくある時点で裏に糸目を出さないことが「皿敷」の特徴として強調され、その後広がったものと考ええる。

敷香教育所の沿革には「土人の生活は太古未開時代に於ける狩猟の状態で、魚族鳥獣を逐ふて転々其の居を移し、自然により自然に服し自らの生産する途を知らないのであるから、斯かる動物的生活から脱して人間的に生活せしめんとするには元より教育に俟たなければならない。」(樺太庁敷香支庁 1933: 23)とある。児童の特性については「1. 不規律、無秩序、喧噪でよく争いするが長上には従順である 2. 注意散漫で怠り易い。3. 覇気に乏しく消極的である。従って競争心、名誉心が薄い」(樺太庁敷香支庁 1933: 25)とする。

つまりオタスのウイлта自身については否定的な評価がされていた。その一方で、ウイлтаの刺繍の技術については称賛されたいことをどう解釈したらよいだろうか。

山崎は、「明治以降に形成された手芸批評のなかでは、手芸作品の価値は高度な技巧によって評価されていたのだが、その評価テキストでは、“高度な技巧をもつに至った婦徳”こそが評価の対象となっていた。つまり手芸が上手な女性＝優れた女性というコンテキストとが存在」していることや、「歴史的に「手芸」をすることは女性の領分とされ」てきたことを指摘している(山崎 2020: 31)。この指摘は、先住民を人間的に教育しなければならないとする敷香教育所のカリキュラムに、手芸が取り入れられ、しかも女兒のみが行っていたことに合致する。さらに「皿敷」が土産品として扱われたことにも注意を払いたい。細かい針目で異国情緒たday文様が施され、また軽くて持ち帰

りやすい刺繍製品は、日本人観光客の求めるお土産品として、うってつけだったのではないだろうか。ウイルタの女性たちはその求めにこたえてもいたことだろう。なお当時日本国内において作られた刺繍製品は庶民のものではなく（松原 2021：54）、刺繍製品自体が珍しいものであったと思われる、これも土産品の特徴となる。当時樺太への観光旅行が促進されていた。「皿敷」はその製作技術を肯定的に位置づけられながら、統治の枠組みの中に取り込まれていった事例のひとつに挙げられよう。

筆者が実見したかぎりのウイルタの「皿敷」やトナカイ革刺繍製品において、稚拙なものではなく、丁寧に作られていたと評価できる。同じ文様のものも認められていないことや、ウイルタの刺繍のさしかたでは一枚仕上げるのにも時間がかかるため量産されていたとも考えづらい。このことから、植民地主義的枠組みへの「皿敷」の取り込みは、単に女性の労働力と異国情緒を収奪するだけのものではなく、ウイルタ女性の文化実践としての側面を併せ持つ、より複雑な過程があったといえる。

以上、本稿ではウイルタの物質文化であるトナカイ革製刺繍製品「皿敷」の誕生と展開について、その歴史的・社会的背景を中心に整理し、「皿敷」をめぐる課題について指摘を行った。今後、日本へ移住したウイルタによる「皿敷」の新たな展開について考察する予定である。

謝辞

筆者にウイルタ刺繍を教えてください、北川アイ子氏とお姉様に心からの感謝を伝えたい。また川村信子氏、小田切洋子氏、ウイルタ刺繍サークルフレップ会のみなさんからもウイルタ刺繍についての教示を得ている。「皿敷」の調査にあたっては北海道開拓記念館（当時）の出利葉浩司氏、旭川市博物館（当時）の瀬川拓郎氏を煩わせた。また有益なご助言を賜った査読者に感謝申し上げます。

参考文献

- 網走市立郷土博物館資料目録 1981『収蔵資料目録：民族編』網走市立郷土博物館：網走
 池上二良 1982『ウイルタの暮しと民具』網走市北方民俗文化保存協会：網走
 池上二良 1997『ウイルタ語辞典』北海道大学図書刊行会：札幌
 井出晃憲 2024「メディアが映す日本統治下の樺太観光：「オタスの杜」先住民観光をめぐる言説を中心に」『境界研究』14：23-54
 ウイルタ協会資料館運営委員会編 1980『資料館ジャッカ・ドフニ展示作品集』ウイルタ協会資料館運営委員会編
 ウイルタ協会資料館運営委員会編 2002『北方少数民族資料館ジャッカ・ドフニ展示作品集〔改訂版〕』ウイルタ協会：網走
 大塚和義 1996「観光地としての「オタスの杜」」『北海道立北方民族博物館友の会季刊誌 Arctic Circle』18：4-7
 大塚和義 2016「オロッコ・ギリヤークの生活」『DVDブック 甦る民族映像：渋沢敬三と宮本馨太郎が撮った1930年代の日本・アジア』岩波書店：東京
 大矢京右 2016「市立函館博物館所蔵潤渇コレクション」『北海道民族学』12：25-34
 亀丸由紀子 2025「アイヌ・ウイルタの布製小物類ほかについて：北海道博物館所蔵アイヌ民具資料整理報告2」『北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究報告』10：1-95

- 樺太庁 1934『昭和5年国勢調査結果表』樺太庁：(印刷所東京)
- 樺太庁敷香支庁 1933『オロツコ(其他)土人調査』樺太庁敷香支庁：敷香
- 河野本道 1976『北方の民具1』(北海道ライブラリー8)北海道出版企画センター：札幌
- 国立民族学博物館編 2013『特別展洪沢敬三記念事業屋根裏部屋の博物館』国立民族学博物館：吹田
- 国立民族学博物館編 2020『特別展先住民の宝』国立民族学博物館：吹田
- 紺野愛子 1970「オロツコ刺しゅう」『仙台北百合短期大学紀要』1：41-49
- 笹倉いる美 1998「ウイльта文化聞き書きノート1：刺繍」『北海道立北方民族博物館研究紀要』7：93-104
- 白石英才、笹倉いる美 2007「服部文庫公開シリーズ4—ニブフ(ギリヤーク)の縫い方」『北海道立北方民族博物館研究紀要』16：69-76
- 市立旭川郷土博物館 1973『市立旭川郷土博物館所蔵品目録』市立旭川郷土博物館：旭川
- 情報局 1942「樺太オタスのよいこども」『写真週報』235：20-21 内閣印刷局
- 田中淑乃 1989「ウイльтаの刺繍」『ウイльта語生活語彙、ウイльтаの刺繍』網走市北方民俗文化保存協会：網走 pp.83-117
- 田村将人 2023「1920年代のサハリン先住民族の移動と国境の関係性：樺太庁による「オタスの杜」集住化」原暉之、宍内勇津流、竹野学、池田裕子編『日本帝国の膨張と縮小：シベリア出兵とサハリン・樺太』北海道大学出版会：札幌 pp.305-335
- 長根助八 1925『樺太土人の生活』洪洋社：東京
- 北海道開拓記念館編 1981『北海道開拓記念館収蔵資料分類目録1：民族1』北海道開拓記念館：札幌
- 北海道教育庁振興部文化課 1974『オロツコ・ギリヤーク民俗資料調査報告書』北海道文化財保護協会：札幌
- 北海道教育庁社会教育部文化課編 1982『ウイльтаの暮らしと民具』網走市北方民族文化保存会：網走
- 北海道博物館編 2025『北海道博物館資料目録第4号』北海道博物館：札幌
- 北海道立函館美術館 1996『木村捷司展：人と自然 その内奥を見つめて』北海道立函館美術館：函館
- 潤渇久治編 1981『ウイльта語辞典』網走市北方民俗文化保存協会：網走
- 松原史 2021『刺繍の近代：輸出刺繍の日欧交流史』思文閣出版：京都
- 宮本馨太郎 1958「オロツコ・ギリヤークの衣食住」『民族学研究』22(1/2)：5-14
- 山崎明子 2020「「手芸」と技術：「つくること」に与えられた社会的意味」上羽陽子編『現代手芸考：ものづくりの意味を問い直す』フィルムアート社：東京 pp.30-46
- 山田祥子、笹倉いる美 2010「北海道立北方民族博物館所蔵のウイльта資料1：対応する北方言の語彙を中心に(1)」『北海道立北方民族博物館研究紀要』19：89-109
- 山田祥子、笹倉いる美 2011「北海道立北方民族博物館所蔵のウイльта資料1：対応する北方言の語彙を中心に(2)」『北海道立北方民族博物館研究紀要』20：97-112

Reynolds, Barrie 1983 "The Relevance of Material Culture to Anthropology." *Anthropological Society of Oxford* 14(2): 209-217

映像

宮本馨太郎 1938 『オロッコ・ギリヤークの生活』

インターネット

日本民族学協会附属民族学博物館（保谷民博）人物／資料データベース

<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoya/>（2025年6月28日閲覧）

Cultural and Social Significance of the Uilta Embroidered Product “Sara-shiki”: From the Perspective of Material Culture, Part I: Sakhalin

Irumi SASAKURA
(Hokkaido Museum of Northern Peoples)

This paper focuses on the embroidered product known as “Sara-shiki” (a type of embroidered table mat), produced by the Uilta, an Indigenous minority group in Sakhalin. It examines its origins and development from the perspectives of material culture and colonial policy. “Sara-shiki” did not originally exist among the traditional household items of the Uilta. It was newly created as part of vocational education at the Shisuka Education Center, established in 1930 in Otasu no Mori, a settlement where Uilta people were concentrated.

Embroidery techniques that had been previously applied to clothing, footwear, and tableware were adapted for the production of “Sara-shiki”. At the same time, paper stencils were developed from birch-bark cutouts used to decorate everyday objects. “Sara-shiki” was later promoted as a tourist souvenir and came to be produced not only by schoolchildren but also by local Uilta women.

Japanese colonial officials, educators, researchers, and tourists highly valued embroidered products such as “Sara-shiki”, yet at the same time made strongly discriminatory remarks about Uilta lifeways and character. In this sense, only the embroidery techniques were praised, and “Sara-shiki” as a new form of material culture was institutionally encouraged. This paper clarifies how “Sara-shiki” was shaped by Japanese demand and institutional frameworks. It highlights the political mechanism by which culturally specific skills and practices were selectively identified and promoted as “usable” within a colonial context.